

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和7年度

京都外国語大学

## はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 7 年 9 月 19 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

|         |                                                                                             |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 氏名      | 香川 雅子                                                                                       |
| 学位の種類   | 博士（言語文化学）                                                                                   |
| 学位記番号   | 乙第4号                                                                                        |
| 学位授与の日付 | 令和7年9月19日                                                                                   |
| 学位授与の条件 | 本学学位規程第3条4号該当                                                                               |
| 学位論文題目  | 近現代キリシタン文学研究——芥川龍之介と<br>遠藤周作のキリシタン史料分析を通して                                                  |
| 論文審査委員  | 主査 教授 長濱 拓磨<br>副査 准教授 アイシュワリヤ スガンディ<br>副査 教授 山根 道公（ノートルダム清心女子大学）<br>副査 教授 細川 正義（関西学院大学名誉教授） |

## 論文内容の要旨

本論文の主眼はキリシタン史料分析を通して芥川龍之介と遠藤周作のキリシタン文学を精査し、「日本人のキリスト教受容」の問題に迫るところにある。方法としては、従来の研究でありあまり触れられることのなかった芥川龍之介や遠藤周作の自筆のメモ、ノート、所蔵書への書き込み、両作家が参照した資・史料の源泉までさかのぼり考察することで、作品に新たな視点をもたらしている。作品を読み解く上での基礎研究としては圧倒的である。以下、目次にそって概要を示したい。本論文は「第一部 芥川龍之介」「第二部 遠藤周作」の二部構成である。

「第一部 芥川龍之介」は「第一章 「聖人」と「殉教」」「第二章 日本と西欧キリスト教との対峙」「第三章 日本の風土と西欧キリスト教との相克」の全三章で構成されている。対象となるのは「切支丹物」と呼ばれるキリシタンを素材にした作品群である。

「第一章 「聖人」と「殉教」」では中世の聖人伝『黄金伝説』の翻訳『聖人伝』に登場する殉教した聖人を主人公とした「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」の二作品である。執筆の際に芥川が参照したキリシタン史料や学生時代のノート「貝多羅葉」、まで網羅して題材に迫り芥川のキリシタン史料解釈にまで迫っている。

「第二章 日本と西欧キリスト教との対峙」では「るしへる」と「おぎん」の二作品を対象にしている。「るしへる」では「るしへる」執筆までに芥川が閲読可能な『破提字子』を全て精査・比較している。さらに日本人のキリスト教理解に合わせて、悪に徹しきれず苦しむ＜悪魔＞像も描いている。続く「おぎん」でも主人公の「おぎん」が棄教してまでも地獄

に堕ちる異教徒である〈生みの両親〉と共に苦しむ決断をしているが、これは芥川が参照したキリシタン史料の一部の教義「人間はキリスト教信仰でしか救われない」に逆らう行為であった。すなわち、西欧キリスト教との対峙の場面として捉えている。

「第三章 日本の風土と西欧キリスト教との相克」では「神神の微笑」と「糸女覚え書き」の二作品を対象にしている。特に「神神の微笑」は「第一節 「神神の微笑」における「キリスト教」」「第二節 キリシタン史料より考察する「神神の微笑」と『沈黙』の2節にわたって詳細に検討されている。従来「神神の微笑」と『沈黙』は日本汎神論的風土と西洋の一神教との対立として、『沈黙』発表当初から類似性が指摘されてきた。ここに香川氏はキリシタン史料という視点を導入し分析している。結論として芥川が参照したキリシタン史料ではキリスト教や宣教師の布教の努力は肯定的にとらえられているのに対し、西欧キリスト教の敗北や宣教師の布教努力は失敗だったとして正反対の結果を作品で提示している。すなわち、芥川も遠藤も日本人のキリスト教受容の困難さを描いたとしている。そして最後に第三節では、細川ガラシャを描いた「糸女覚え書き」を対象にしている。在源となるのは、細川家文書の「霜女覚書」で架空の侍女く糸女〉から見た細川ガラシャの姿が描かれている。庶民から侍女となったく糸女〉は女主人への羨望と信仰への無理解によってガラシャの信仰を愚弄している。そこにはキリスト教に対して反発と魅力の矛盾した気持ちや「基督教的信仰或いは基督教徒を嘲る」意識を持っていた芥川の気持ちに寄り添ったものと言える。

「第二部 遠藤周作」は「第四章 キリシタン史料と初期作品」「第五章 キリシタン研究と第二バチカン公会議」「第六章 日本人と西欧キリスト教」の全三章で構成されている。

「第四章 キリシタン史料と初期作品」では、遠藤周作が初めてキリシタンを主人公にして書いた「最後の殉教者」と「留学生」(のちに『留学』の一章となる)を扱っている。「第一節 遠藤周作の「殉教観」」では浦上四番崩れを背景とした「最後の殉教者」を歴史的背景や影響を受けたベルナノス『カルメル会修道女の対話』など見る殉教観を比較検討して小説にあらわれた殉教観を第二バチカン公会議で宣言された「愛とゆるしの神」の先取りとして結論付けた。「第二節 「留学生」の荒木トマス」では背教者である荒木トマスを『沈黙』で背教したフェレイラやロドリゴ(ジュゼッペ・キャラ)の先行者として背教の理由に迫っていく。

「第五章 キリシタン研究と第二バチカン公会議」は遠藤周作の歴史小説の区分が1980年を分岐点とできることからこの変化に第二バチカン公会議の影響を見て、1980年直前の作品として「銃と十字架」を検討する。

第二バチカン公会議は1962年から1965年まで開かれ、「他宗教との対話」や「愛の掟」などが決定された。そうした中で『沈黙』(1966)は当初教会からの激しい批判があったが、第二バチカン公会議の「愛とゆるしの神」が信徒の間に浸透していく中で大きく評価軸が変わった。このあたりのダイナミズムを「第一節」で捉え、実質的な「愛とゆるしの神」の概念が描かれた作品として「銃と十字架」における「かくれ切支丹」やペドロ岐部などを豊富

なキリシタン史料に準拠しつつ見ていく。

「第六章 日本人と西欧キリスト教」では、遠藤周作の歴史小説の分岐点にある『侍』と「細川ガラシャ」「日本の聖女」を対象にしている。『侍』の主人公・長谷倉はいうまでもなく伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節の支倉常長をモデルとしている。さらに随行した宣教師・ベラスコはルイス・ソテロという実在の人物であり、ベラスコと長谷倉に分けてそれぞれキリシタン史料から事実とフィクションを追求する。最後に細川ガラシャを遠藤は人間的で陰のある面が強調された独自の解釈を施していることを西欧人の宣教師が残した資料と比較検討して考察している。

以上、神学的視点と歴史学的研究方法によって芥川、遠藤が扱ったキリシタン史料を克明に調査し、その史料と両作家の作品との緻密な比較分析を行うことで、これまでの先行研究の未開の領域を切り拓いた点に新規性があり、今後の芥川龍之介研究および遠藤周作研究において多大な貢献が期待される内容となっている。

## 口述試問

主査の長濱からは、二点の指摘があった。一つ目は「キリシタン史」研究としては優れているが、「文学研究」として物足りない点である。問題となるのは、両作家がキリシタン史料から改変・加筆した箇所に関して作家の「キリスト教受容」の問題に集約しているところにある。元来作家は素材（ここではキリシタン史料）を駆使して作品を作り上げるもので、そこに作家の思想や宗教意識が強く反映されるのはもちろんだが、文学作品としてあるいは登場人物の創造、読者をどう意識したかという点も考慮すべきではないかというものである。

二つ目は芥川と遠藤の比較がもっとあってもよかったのではという点である。「殉教」「棄教」「日本と西欧キリスト教の対立」「細川ガラシャ」というように共通するテーマは多くあり、「殉教」を例にとっても、芥川は「殉教者の心理」に重きを置き、遠藤は殉教者になれなかった「背教者の心理」に重きを置いているなど違いはあきらかであり、「棄教」についても「おぎん」で地獄に堕ちる異教徒と共に苦しむ決断が『沈黙』で踏絵が迫害に苦しむ農民を救う「愛の行為」となったなど比較することで両作家におけるキリスト教観の差がより鮮明になる。

スガンディ氏からは三つの指摘があった。一つ目は、キリシタンを描くときの芥川と遠藤の違いである。信仰者ではない芥川と信仰者である遠藤においてキリスト教理解やキリシタンに対する視点がことなるのは当然であり、その点はどう考えるのか。二つ目は両作家が置かれた時代背景をどう考えるのかである。芥川と遠藤の間には約 50 年の差があり、その間にキリシタンについても新史料の発見や評価など大きな動きがあるはず。そして最後に他作品との関連である。遠藤は取材の際に必ず現地に出かけ、キリシタン史料を読むだけでなく、その場所にかつて生きていた人々を作家の想像力で再現し、小説として描いていっ

た。その際に一つの作品だけではなく関連する複数の作品を総合的に見る必要性がある。

細川正義氏からは主に芥川のキリスト教観と作品の評価について指摘があった。芥川は高校時代に聖書に触れ、死ぬ間際まで聖書を読んでいたことが知られている。『西方の人』ではキリストへの強烈な問いかけがあり、この点では信仰者の遠藤よりもより厳しい問いかけがあったのではないか。作品の評価についても、両作家がキリシタン史料と異なる独自のキリスト教観を描いたことは解明されているが、そうして表現されたものを文学作品としてどう評価していくかが次の課題となるだろう。

山根道公氏からは、以下の指摘があった。論文題目の「キリシタン文学研究」の「キリシタン文学」について、辞書的な定義「室町末期から江戸初期にかけて、キリシタンの宣教師などにより、日本語で著述・翻訳された宗教文学、および宣教用・語学用の書物。」といった一般的な意味ではないゆえに、論文の最初に、この論文における定義を示す必要がある。その際に、キリシタン時代のキリシタン文学と、それを史料として利用することで創作された近代日本のキリスト教文学との関係性にまで言及することも必要であるように思われる。

これらの指摘に対し、キリシタン史料と比較・検討した意義を改めて確認した上で、文学研究としては不足な点があったことを認め、今後の課題とする旨の回答があった。

## 審査結果

以上、「キリシタン文学研究」としては、「キリシタン文学」の定義や作品の評価などいくつか問題点はあるが、芥川龍之介と遠藤周作のキリシタン史料分析という点では、新規性、貢献性の高い論文であり、博士の学位授与に値すると判断する。